

中央政府に捕まっ
た男性議員の話





中央政府に捕まった男性議員の話

栞

それはあまりに突然の出来事だった。

「緊急の連絡」とのことで国会にはほぼ全ての男性議員が集められて呼び出し人である総理を待っていた。

「やれやれ、こんな朝っぱらから一体何の用だか」

「これだけの人数が集められているとなると、よほど緊急のことでしょうか…」

時刻は午前8時前。

各々が席でざわざわと談笑をしており、中には居眠りして少しでも睡眠時間を確保しようとしている人もいた。

25歳で議員に選ばれてからまだまだ半年足らず。

少しずつ職務や国会の雰囲気慣れ始めてきたところだ。

一つ年下の彼女と昨年結婚したばかりで、家庭での生活も順風満帆だった。

(しかし…何か妙だな……)

周りを見渡してみるも、男性議員ばかりで女性の議員が一人も呼び出されていないことに気がついた。

男性の議員だけに伝える緊急の事例とは何だろうか…

少しだけ、嫌な胸騒ぎがしていた。

「なに、どうしたのそんな険しい顔して～。まだ緊張してるのかー？」

隣の席に座っていた一回り年上の議員に話しかけられる。

「いえいえ、総理からの緊急の連絡とは何か考えていただけです！」

「そうか！何だろうな、実は奥さんにフラれた…だったりしてな！」

「ハハハ！まさか…」

そんなわけではないだろう。縁起でもない。

まだ総理は来ないのだろうか。
そろそろ約束の時間だが…

そう思っていた矢先、突然後ろから「バタリ！」と扉が閉められた音が聞こえた。

思わず後ろを振り返ってみると、何やらスーツを着た女性らしき人物が扉を封鎖していた。
顔にはガスマスクのようなものを付けており、表情は確認できない。

「な、なんだ一体…！」

「おい！警備はどうなってるんだ！」

「くそっ！？何だ！？手足が動かない」

騒然とする男性議員たち。
自分も立ち上がろうとするが、手足に痺れのようなものを感じて一切力が入らないことに気づいた。

ふと上を見てみると、何やら霧状のミストが議員席に降り注いでいるのが見えた。

くそっ…いつから仕込まれていたのだ…！！

男性議員たちの声を鎮めるかのように、「ぎい……」と"開かずの扉"がゆっくりと開いていく。

シーン…と、まるで氷のように静まり、優雅な気品すら漂わせゆっくりと中央へと歩いていく人物に注目していた。

スーツ姿に長い髪。
顔には東洋風の豪勢な仮面を付けており、妖しい笑みを浮かべた表情が描かれていた。

「……………」

女性なのか、男性なのかも分からない。
そして、ゆっくりと、ごく自然にそれが当たり前の動作であるかのような佇まいで普段総理が座っている場所に着席した。

そして……「パチリ」と指を鳴らすと、"開かずの扉"の奥から悲痛な笑い声が聞こえてきた。

「ひやめっあああっあああつも、もうひやめでくださいいいごめんなざいごめんなざい
ごめんなざいゆるじてゆるじてゆるじてくださいいいいいいい」

これは…総理の声だ……！！

あまりに突然の出来事に脳が追い付かない。

仮面を付けた女性に両脇を抱えられ、さわさわと腋の下や脇腹を撫でられている総理の姿。

全裸の格好で顔には涙と恐怖の表情を浮かべて、狂ったように笑いながら何度も何度も許しを乞う姿は異様だった。

他の議員たちも言葉を失い愕然としている。

半ば強引に引き摺るような形で、総理の席に座る謎の人物の前へと総理を連れていく。

そして、無理やり跪かせて組伏せてしまう女性たち。

自分も含めて、その異様な光景に男性議員たちは誰も声を上げることはできなかった。

「……………」

沈黙したまま、ゆっくりと総理の椅子から立ち上がる人物。

組伏せられてビクビクと身体を震わせている総理の元に歩いていき…

「ひっ！？ゆ、許して！！も、もうこれ以上はやめっ」

「黙れ。」

脅える総理の声を遮り、始めて口を開いた。

力強く、凜とした声から"女性"だと分かった。

総理を組伏せていた女性たちが、今度は仰向けになるように押しえつける。足首、腰の上に馬乗りして、両手を力づくで床に万歳させている。

そこに、謎の女性がゆっくりと腰を総理の顔に降ろしていく。

「ひっ！？やっ、やめてくれ…んぐっ！？んんっー！！」

総理の両腕を万歳させたまま自身の脚で挟み込むように押さえつけ、顔の上にピッタリと座り込んで口や鼻を塞いでしまった。

その状態のまま、一斉に指をこちょこちょと激しく動かして総理を苦しめる女性たち。

「んぐっ！？んんんんっー！！んんっ！！んんっぶぶぶ！！んぐっんんー！！」

総理の口からはくぐもった笑い声が漏れ苦しそうな様子が伝わってくる。

足の裏は爪でガリガリと引っ搔くように激しくこちょこちょとくすぐり、太ももや脇腹を容赦なくもみもみと責め立てる女性たち。

そして、総理の顔の上に座った女性は、首筋や腋の下に指を這わせて素早くこちょこちょとくすぐっている。

このままだと…総理が死んでしまう…！！

まだ身体は痺れており動くことはできない。

他の議員たちも抵抗できず、惨状を見つめることしかできなかった。

女性たちは皆淡々と無言で総理をくすぐり悶え苦しめていく。大の大人の男性が女性に恐怖し、子供の遊びのくすぐりで支配されてしまう異常な光景にえもいわれぬ恐ろしさを感じてしまう。

「…そろそろトドメを刺してやる。」

「んんっー！！んぐっんんっー！！！！んんっ！？」

総理の身体の抵抗が一段と強まるが、それを容易く押さえつける女性たち。より激しく、より素早く指を身体に這わせて強制的に笑わされるのはどれ程辛いのだろう……

腰の上に馬乗りしている女性が、総理の逸物へと指を這わせてこしょこしょとくすぐって
いく。

その数秒後、長い悲痛な断末魔を上げて総理の身体が大きくビクン！ビクンと跳ね上がり、
次第に笑い声や身体の痙攣が小さくなり、そして……最後にはピクリとも動かなくなって
しまった。

ようやく女性たちが総理から離れる。

総理の顔は白眼を剥いて涙や涎でぐしゃぐしゃになり、口元はひきつった笑みを浮かべて
いた。

総理のお腹や太ももには、女性によって無理やり射精させられた大量の精子で白く汚され
ている。

(こんなの…レイプじゃないか…！それ以前に…殺人だ…！)

怒りで今すぐ立ち上がり総理の元へ駆け出したいが、身体は言うことを聞かなかった。

…謎の女性は、ゆっくりと中央に移動して座っている男性議員たちに語り始める。

「…本日を持って、この国は私が支配する！！女性が愚かな男性共をくすぐりで支配し、教
育し、躡してやる。…楽しみにしているがいい。」

「…ふ、ふざけ……」

あれ……声が掠れる……

くそっ……意識も……段々遠退いていく……

…遠くであの女性が自分の顔を見て、ニヤリと笑みを浮かべた気がした……

……知らない天井。知らない空間。

目が覚めて気付いた時には白い壁に囲まれた部屋に寝かされていた。

まるで手術室のような、いや、どこかの研究室のような空間。

「……くそっ！？なんだ…どうなってるんだ……」

まだ頭では理解が追い付かない。

着ていた服やパンツまで脱がされ、全裸の状態で両手両足を真っ直ぐ伸ばした姿で台に拘束されていた。

足首も嚴重に拘束され、足の指も1本ずつ固定されている。

膝や肘、手首といった関節にしっかりとベルトで拘束されており、どれだけ力を入れてみても簡単に脱け出せそうになかった。

しばらく無駄な抵抗をしていると、静かに部屋の扉が開いて複数の女性が入ってきた。

「な、なんだお前ら……」

スーツを着た女性が3…4…5人に、白衣を着た研究者のような女性が1人。

「おはよう。目覚めの気分はどうだ？」

「…質問に答えろよ。お前たちは一体何者なんだ！それに…よくも総理を……！」

「質問に答える義理は無いが…私は新政府の拷問組織を任されている美咲だ。さて、本題に入るが貴様は新政府に協力してもらおう。承諾してもらえるのであれば丁重に扱っても良いとボスからの指令が出ているのでな。どうだ？協力する気はあるか？」

美咲と名乗る女性がリーダー格なのだろうか。

顔を見下ろされ、一方的に要求を突きつけられる。

「いきなりだな…何が目的だ」

「先ほど国会でボスが宣言した通りだ。この国は女性によって支配される。全ての男性は女性にくすぐられて支配され、教育され、躰られる社会への改革。全国民が我々の手に堕ちるのも時間の問題だろうな。」

「そんなこと、全ての国民が同意するはずもない！それに、他の議員や裁判所だって…」

ふふっ♪と可笑しそうに笑い始める美咲。
まるで、何も分かっていないとでも言いたげな表情。

「国民の同意など必要はない。全国民に身体で分からせ、反対する者は拷問し処罰する。貴様の言う他の議員とは誰のことだ？くすぐられて惨めに窒息して果てた"前総理"のことか？それとも、既に監獄に囚われて"処分"されている男性議員のことか？」

「この…外道が…！！」

「言葉を慎め。貴様も今すぐくすぐり殺してやっても良いのだぞ？」

「…くそっ……………」

国会での総理がくすぐられていた光景がフラッシュバックしてしまう。

「さてと、もう一度聞くが我々に協力する気はあるか？貴様は若い。政府にとって利用価値がある。男性議員から女性にくすぐられる魅力を国民に広報してもらおうか。そうすれば国民の反感も少しは抑えられるだろう。」

…大人しく従うべきだろうか、一瞬弱気になって考えてしまう。女性が男性をくすぐりで支配する…？何を言っているのだこいつらは。そんな社会など、1人の男性として、議員として認められるはずはなかった…！！

「…断る。誰がお前たちなんかに協力するか！」

可哀想にとでも言いたげな憐れみの視線を向ける美咲。

「そうか。それは残念だな。…おい、準備を始めろ。」

周りにいたスーツ姿の女性たちは、ツルツルとした手袋を手にはめる。

そして、白衣を着て眼鏡をかけた女性は何やら透明の瓶を持っており、中には液体が入っている。

「ね～みさき～？もうコレかけちゃっていい？」

「構わん。手筈通り全身に塗ってやれ。」

「は～い♪」

陽気な白衣の女は瓶の蓋を開け、ゆっくりと透明の液体を首から胸、お腹、太もも、ふくらはぎ、足の裏に垂らしていく。

そして、スーツを着た女性たちが満遍なく身体に塗り込んでいく。

「うぐっ……くっふふ…な、なにする気だ…！っっ！！？」

身体中がゾクゾクとしたくすぐったい感覚に包まれていき、思わず口元から笑い声が漏れてしまう。

「今貴様にかけてのは開発中のオイルだ。皮膚に垂らすと感度が倍増する成分が入っている。そのオイルをたっぷりと染み込ませた状態で思いつきくすぐったら…どうなると思う？」

「ひっ！？っっぐっ…ふふっ…や、やめろ…！！」

手袋を装着して目の前で見せつけるようにして指をワキワキと動かしている美咲。

「…美咲様、準備ができました。」

「よし、ではこれよりくすぐり拷問を開始する。」

他のスーツ姿の女性たちが、ゆっくりと身体に指を近づけていき…

一斉にちょちょ激しく責め立てられる！

ちょ～♪

も言うこと聞きますからあああああっぎやあああっはははははははははは！！！！」

半ば白眼を剥いてはちゃめちゃに笑い狂わされる。

生命の危機に関わるようなあまりに凄絶なくすぐたさの前ではとっくに怒りなど消失してしまい、何度も何度も自然と口から「ごめんなさい」という言葉が出てしまう。

しかし、どんなに泣いても謝っても女たちは決して手を緩めてはくれず、それどころかくすぐりは益々激しさを増していくばかりだった。

酸欠で目の前がチカチカと点滅する…

涙で視界がぼやけて何も聞こえなくなってきた…

「…一旦ストップ！」

あと、ほんの少しで完全に意識を失ってしまうだろうというところで、大きな声が部屋に響く。

その声でピタリとくすぐっていた指が身体から離れる。

「はあっ…はあっ…げほっ、ごほっ、はあっ…はあっ…」

必死に呼吸を整えて肺に酸素を取り込む。

すっかり顔は涙や涎でぐしゃぐしゃになり、全身は汗とオイルで濡れて光っていた。

半開きの口に、無理やりペットボトルの水を流し込まれる。

「んっんぐっ！？んっっ！！ごくっ、ごくっ…ぷはあっ…はあっ…はあっ…」

「脱水症状で意識を失われたら困るからな。どうだ？そろそろ我々に協力する気になってくれたか？」

顔を優しくタオルで拭かれ、美咲にしっかりと目を見下ろされ問いかけられる。

協力したくないという気持ちと、これ以上はくすぐられたくないという気持ちが葛藤して、黙秘してしまう。

「何も答えないのか？あるいは答えられないのか。…まあいい。少し休憩させてやろう。この映像を見れば少しは気が変わるだろう。」

部屋の照明が暗くなり、プロジェクターを用意する女性たち。そして、ある映像が映し出される……

「なっ！？こ、これは俺の家……？」

見慣れた一軒家。玄関の前にスーツ姿の女性たちが立っており、チャイムを鳴らす。そして、最愛の妻である華奈が扉を開けると、一斉に家の中に侵入していく。

「ちょっと、何なんですかいきなり！んぐっ！？」

1人が華奈を羽交い締めにして、別の女性が目隠しを頭に巻いていく。口は手のひらで塞がれて力づくで寝室へと連行される。

いつの間にカメラを仕掛けられていたのだろう。

スクリーンには夫婦の寝室の映像が映し出される。

そこに、女性たちに手足を担がれた華奈がやって来て無理やりベッドに仰向けで寝かされる。

押さえつけられながら力づくで服や下着を脱がされていく華奈。

「い、いやっ！！やめっ、やめてっ！！」

今にも泣きそうな華奈の声…

女性たちは気にせずベッドに両手両足を大の字の状態に拘束して、その上から1本ずつしっかりと馬乗りして押さえつける。

そして、5人がかりで一斉に無防備な身体をこちょこちょとくすぐっていく！

「ひっ！？きゃあああっ！？あああっあはははははははははははははははははは！！やめっ！！ひやめてえええっああああんあああっはははははははははははははははははは！！やだあああっあああくしゅぐっだいいああああっはははははははははは！！」

映像が切り替わり、華奈の悲痛な表情が映し出される。

首筋、腋の下、脇腹、お腹、太もも、足の裏…

くすぐったくて我慢できないところをねちねちと容赦なくこちょこちょと無言で責めていく女性たち。

華奈はパニックになったように笑い狂って何とかくすぐったい刺激から逃れようとしているが、多勢に無勢で押しえつけられてお仕置きとばかりに執拗にこちょこちょされる。

「ひやああああっははははは！！だれかああっああっひやああうた、たすけてええっああああもうひやめてええええっああっはははははは！！！」

美人な妻の顔は涙や涎でぐしゃぐしゃになり、苦しそうに笑い悶えている…

太ももをくすぐっていた女性は、華奈の秘部に指を這わせる。

「ひゃんっ！？あはっひやらああっそ、そこひやめっああっんああああっひやああっんあっ！！ああっああっ！！！」

割れ目をこしょこしょと指でくすぐり、クリをさわさわと刺激する。そして、妻のあそこに舌を這わせて厭らしくぐちゅぐちゅと舐めながら空いた手で脇腹や鼠径部を器用にもみもみとくすぐっている。

腕に跨がり首筋や腋の下をくすぐっていた女性たちは、身体を寝そべるようにして妻の頭を手で押しえつけ、両側から耳に「ふ〜っ♪」と息を吹きかける。

そして、耳の穴に舌を入れてぐちゅぐちゅと舐めてくすぐり犯しながら、片手で首筋や乳首、胸横に手を伸ばしてさわさわこちょこちょと優しく刺激していく。

「ひやああああんああっあははは！！ああんああんひやめっああっんああっ！！だめっひやめっああん！」

これまで、妻との営みの中で一度も聞いたことがないような気持ち良さそうな声を出して涎を垂らしながら笑い悶える華奈。

しばらくすると、ひとき悶える声が大きくなり、身体をビクン！ビクン！と痙攣させてあ

そこから愛液が溢れ出る。

「だめっ、だめええええああっん!!! ああっ!!! ひやああっ!!! あはっひやあああはははははははは!!! あああっひやらああああもうひやめてええええんああっ!!!」

クンニしていた女性の顔やスーツにエッチな汁がかかりびしょ濡れになってしまう。しかし、イッても止めずにお仕置きとばかりに割れ目に舌を入れ、「ハムっ♡」とクリトリスを甘噛みする女性。

その瞬間、華奈の身体が大きく痙攣して悲痛な笑い声を上げる。

「ああああんああっつきやあああんああっひやめっ、ひやめでえええっあああんああっひやらあああ!!! おかじくなるからあああっああっんああっひやああっ!!!」

イッたばかりで敏感になっているであろう華奈の身体を 5 人がかりで執拗にこちょこちょと容赦なく責める女性たち。

その後も 2 度、3 度と強制的にイカされ、舐められながらくすぐられ、白眼を剥いて完全に抵抗する力が無くなるまで責められ続けていた……

「くそっ!!! くそがああっ!!! おまえら!!! 華奈は!!! 華奈は無事なんだろうな!!! もし華奈に何かあったら…絶対に許さないからな!!!!」

ギシ…ギシと拘束具が音を立てる程、怒りで身体に抵抗する力が戻ってくる。

「ふふっ♪愛する妻がくすぐられている姿を見て興奮したか? これで少しは我々に協力する気になったか?」

「ふざけるな!!! それよりも、華奈は無事なんだろうな?」

「どうだろうな? もし、貴様が協力してくれるのであれば最愛の妻に会わせてやろう。でも、断るのなら…無事は保証できないなあ? あ、でも女性の場合は命までは取らないから安心しろ。ただし…貴様の態度によっては死ぬよりも 100 倍辛いくすぐりによって廃人になってしまうかもしれないがな。」

「ぐっ……………っ！！」

どこまでこの女たちは卑劣なのだろう。
しかし、華奈のことを考えて喉から言葉を押し殺す。

もしも反抗してしまったら、自分だけでなく、華奈にまで危害が及ぶ可能性がある…。

ここは、大人しく従う道を選んだ……

「…分かった。協力するよ…！」

「おや？嘘はいけないな～？口ではそう言っているが、顔に嫌だけど仕方なく協力するって書いてあるぞ？」

「ち、ちがっ！！ほ、本当だ！！協力…させてください！」

必死に美咲の顔を見て訴える。
しかし、再び女性たちが足元や両脇にスタンバイをして指をピタッと身体に添えていつでもくすぐることができる準備をする。

「ひっ！？ほ、ほんとだ…し、信じて……」

「…くすぐり拷問を任されている私には特技があつてな、相手の目を見れば何を考えているのか何てすぐに分かるんだ。お前は嘘をついている。心の底から『協力する』とは言っていないだろう？私は嘘をつかれるのが大嫌いなんだ。だから…今から徹底的に教育して躰直してやるよ。その後でまた話を聞いてやる。」

「や、やだっ……やめっ、お、お願いだから…も、もうくすぐりは…！！やっ、ひやあだあ
あああつうぎやあああつはははははははははははははははははは！！あああつひやめでええ
でつあああじぬうううああつはははははははははははははは！！！！も、もうむりだからあああ
あつごめんざいいああつはははははははひやめでえええおかじくなるうう！！！」

また全身のくすぐったいところを容赦なく一斉にこちょこちょとくすぐられる。

少し休憩して時間が経った分、体力も感度も復活してさっきよりも数倍はくすぐったくて辛く感じる。

「いっ！？ひゃああんああっあははははははは！！ああっんああっな、なにこれええああんああっひゃああああっはははははははははははははは！だ、だめえんああああんああおかひくなるううああああっはははははは！」

白衣の女がオナホのスイッチを入れると、中がきゅ〜っ♡とペニスを締め付けるように収縮し、ぐちゅぐちゅとくすぐり犯される。ゆっくりと上下にオナホを動かされるだけで、あまりの快感に腰が抜けてしまいそうになる。

そして、もう片方の手で玉袋や肛門にまで指を這わせてこしょこしょと優しくくすぐられる。

「これはお仕置きだと言うのに、随分と気持ち良さそうな顔だな？全員、もっと本気でくすぐってやれ。」

スーツ姿の女性たちは、これまで以上に激しくこちょこちょと弱いところを責め立てる。

足の裏はオイルでびしゃびしゃにされ、空気が触れるだけでくすぐったいにも関わらず、硬いブラシで乱暴気味にゴシゴシと土踏まずや足の指の付け根を責められる。

あまりのくすぐったさに目から涙がドバドバと流れ落ち、声が枯れるほど絶叫させられる。

脇腹やお腹をくすぐっていた 2 人の女性も、両脇にあるくすぐったいツボを探り当てて指先でぐいぐいと押し込んでもみもみとくすぐって刺激していく。ぬるぬるのオイルと手袋によって痛みは感じさせず、純粋で暴力的なまでのくすぐったさが身体を支配する。

お腹やおへそは爪を立てるようにこしょこしょと素早くくすぐり、ぞわぞわとしたくすぐったさが身体を貫く。

その上では、美咲さんが腋の下のツボをモミモミと刺激し、器用な指先で激しくこちょこちょカリカリと責め立てる。

時折、首筋にも指を這わせてゾクゾクとしたくすぐったさを脳に送り込まれて口元から情けなく涎が垂れ落ちる。

「ああああっひゃああああくひゅぐっだいいああだめえええっああああっぎゃああっごめんなざいいああっははははははははははははははは！！み、みさきさまああああっお

あっははははははははははひやめでえええっおねがいしますううああっ！！！！」

もうあまりのくすぐったさで反抗する気力も失われ、"様"を付けて名前を呼び許しを乞うてしまう。

精神的にも、ペニスの方も限界は近い……

「ああっだめっあおあっ！！！！いっ！！！！イクううううっつああっ！！！！あああっ！！！！あひっ、ひっつあああっひやめっ！あああっぎやあああああっあっはははははは！！！！」

ピュルルルル♡ピュルル♡びゅる……ドピュッ♡

映像で見た華奈のように、身体が大きくビクン！と跳ね上がり、オナホールの中に大量の精子を吐き出してしまう。

イッてる途中に、一際強く「きゅ〜っ♡」と中で締め付けられるような感覚があり、一滴残らず搾り取られてしまう。

頭が真っ白になるほど強いくすぐったさと快感…

射精後の脱力感から意識を失いそうになるが、容赦なく責め続けているくすぐったい指先によって強制的に意識を呼び起こされてしまう。

「ふふっ♪イッちゃったね〜？これからが辛いだよね〜？でも空っぽになるまでイジめてあげるからがんばれ〜♡」

「ひっぎやあああだめえええあっ！！あははははは！！ひやめでええっ！！い、今イッたばっかだからああああっはははははははおかじくなるううあああっはははひやめでくださいいいあああおあっはははははははははははは！！！！」

射精したばかりでさらに敏感になった身体を容赦なくこちょこちょされながら、ぐちゅぐちゅとオナホでペニスを刺激されて強制的に大きくさせられてしまう。

あまりのくすぐったさと快感で、プチッ、プチッと脳の神経が焼き切れていくような感覚…

大事な華奈のことも、他の議員や国民のことも、何にも考えられなくなるくらい笑い狂わされて何度も何度も射精させられる。

ピュルル♡…ピュル…♡

どんなに泣いても叫んでも暴れても女性たちは絶対にくすぐりを止めずに責め続けている。

そうして、空っぽになるまで搾り取られてくすぐられ、白眼を剥いて身体中がピクピクと痙攣して再び失神しそうになったころ、ようやくくすぐっていた指やオナホールが離れた。

「こんなに出しちゃってすごいね～♪もしかして一生分使い果たしちゃったりして～♡」

ピクン！ピクン！と空打ちしているペニスの裏筋をすーっと指で撫でていじめる白衣の女性。

息も絶え絶えで、今にも気を失いそうな僕を見下ろす美咲さん……。

耳元に口を近づけ、「ふ～っ♪」と耳の穴に息を吹きかけられる。

「ひっ…ひゃうっ…ひっ…ひひっ…や、やめっ、」

その刺激だけで身体中にゾクゾクとしたくすぐったさが駆け抜けてビクビクと笑い悶えてしまう…。

「どうだ？くすぐりの恐ろしさと快樂が少しは理解できたか？」

「ひっ！？はいつ…はいいっ！！」

何度も何度も必死に首を縦に振り肯定する。

そんな僕を見て、ようやく優しい表情に戻る美咲さん…

「さて…では改めて聞こうか。貴様は我々に協力し、政府の奴隷として働く気はあるか？」

じっと目を見つめられて問いかけられる。

…この女の前では嘘は付けない……それに、本心から協力すると答えなければ信じてさえくれないだろう。

僕は、すーっと深呼吸をして真っ直ぐに美咲さんの目を見つめ返す。

「美咲さん……」

「何だ？」

そして、覚悟を決めて自らの想いを伝える。

「僕は…これから政府に協力し、男性が女性にくすぐりで支配される社会に向けて尽力していきたいと思います…！！」

…長い沈黙。ゴクリと唾を飲み込む。

ゆっくりと、美咲さんが口を開いた。

「…その言葉、神に誓えるか？」

「はい…誓います！！」

即答すると、ようやく張りつめていた空気が少しだけ柔らかくなった。

「いいだろう。もしも裏切ったら…貴様の大事な人を目の前でくすぐり処刑してやる。そして、私の手でお前をくすぐり殺す。分かったか？」

「は、はいっ……分かりました…」

「よろしい。では早速働いてもらおうか。20代の男性はどれぐらいの時間くすぐれば失神するのかデータが足りなくてな。その実験台になってもらおう。」

指を目の前でワキワキと動かす女性たち…

「ひっ！？いやっ、いやっああっ！も、もうくすぐりは！！くすぐりだけは勘弁じでええっ
っああっ！！ひゃああだうつぎやあああうはははははははははははははははははは！！…」

こうして、その後も女性たちの手によってぶっ通しでくすぐられ続け、ようやく気絶して意識を失うことを"許された"。

**

一方、その頃政府官邸ではクーデターの首謀者である新しい"総理"が水面下で動いていた全国にいる部下に指示を送り、戦況を見つめていた。

コンコンコン、と扉がノックされる。

「総理、失礼いたします。」

「美咲か。彼の様子はどうだ？」

「政府に協力するとの言質を取り、調教、舐まで完了しております。この後彼はどういたしますか？」

「1ヶ月ほど施設に軟禁しておけ。そこでたつぷりと女性にくすぐられる恐怖と快楽を刻み込んで調教だな。彼の妻は私が直々に面倒を見て"教育"しておく。」

チラリと美咲が部屋の隅に目を向けると、移動式の拘束台の上に全裸の女性が寝かされていた。

全身に引っ掻いたような跡が赤く残っており、ピクピクと小刻みに痙攣している。

「…かしこまりました。総理。」

モニターには各地の様子が映し出されている。

政府によるクーデターに反対する団体が早くも鍛え上げられた女性たちにより鎮圧されていた。

「国の統治に向けてこれから忙しくなるが楽しみだなあ？美咲？」

「はい。総理」

自分の夢描いた理想の社会への実現に向けて、愉しそうな笑みを浮かべている総理は無邪気だ。

それから、何かを思い出したようにフッと真顔になり、美咲は思わず背筋を正す。

「…さて、これから政府に敵対する者を炙り出す仕事、くすぐり拷問師がたくさん必要になる。美咲には正式な拷問部隊の組織を、国民全員が羨むような国家資格者という位置付けで制度を作り、人材を集めて欲しい。…できるよね？美咲？」

「かしこまりました。くすぐり拷問師組織化に向けて尽力して参ります。」

「流石だね。期待しているよ、美咲。」

こうして、「女性が男性をくすぐりで支配する社会」に向けて着々と準備が整えられていくのであった。

中央政府に捕まった男性議員の話

発行日 2023年4月8日

著者 朶
<https://www.pixiv.net/member.php?id=30207914>

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
